黒田夏子『*ab*さんご original』刊行記念
試し読み＆読み比べ
特別リーフレット

黒田夏子「*ab*さんご」が、蓮實重彦氏の選考による第24回早稲田文学新人賞を受賞して1年、そして第148回芥川龍之介賞を受賞してから9か月が経ちました。すべて横書きで、固有名詞や代名詞を用いず、ひらがなを多用した文体は、黒田さんが史上最年長で芥川賞を受賞したこととともに大きな話題となりました。
「*ab*さんご」は、準備から執筆まで9年間を費やし、1993年に完成。その後、早稲田文学新人賞への応募に際し、規定にあわせて40章・280枚の作品が15章・100枚弱、およそ1/3の量に再構成されました。
ノーカットバージョンの「*ab*さんご」は「早稲田文学⑥」特装版のふろく特製本「*ab*さんごoriginal」として読むことができます。

このリーフレットでは、ふたつの「*ab*さんご」の作品冒頭の章、そして「*ab*さんごoriginal」だけで読める章をひとつ掲載しています。さらに、ふたつの「*ab*さんご」の違いや、この作品にまつわる著者のことばや楽しみ方のコツをご紹介。すでに「*ab*さんご」を読んだ方も、さらに未読の方や読みかけで挫折した方も、きっと「*ab*さんごoriginal」を読みたくなる、奥深い「*ab*さんご」の世界をお楽しみください。

「*ab* さんご」内容紹介

片親を早くに亡くした「子」と、残されたもう片方の「親」。かたく結ばれていたふたりの幸福な関係は、何人めかの「家事がかり」が来てから、互いを思いやるゆえの誤解や遠慮の果てに、思わぬ方向に変わっていく……。
戦前に生まれた幼子が成長し、親を看取るまでの歳月を通して描かれている、戦前の知的階級の暮らしぶりや、戦後の物不足、風俗の移り変わりなど、今は失われた昭和の日本の姿も反響を呼んだ。

「*ab* さんご」に寄せられた声

『*ab* さんご』を読むとは、我々のまなざしが文字に触れることを妨げる思い込みから自由になることなのだ。

——小野正嗣（朝日新聞書評）

強固な文学観を土台とした稀に見る特異な才能

——宮本輝（芥川賞選評）

「*ab* さんご」は、あくまで横書きで書かれ、あくまで横書きで読まれるべき作品であり、ごく素直にたどれる語彙や構文からなっているとはいいがたい。とはいえ、ここでは、読む意識への言葉の無視しがたいさからいこそが読まれねばならない。誰もが親しんでいる書き方とはいくぶん異なっているというだけの理由でこれを読まずにすごせば、人は生きていることの意味の大半を見失いかねない。

——蓮實重彦（早稲田文学新人賞選評）

「*ab* さんご」と「*ab* さんご original」

「*ab* さんご」と「*ab* さんご original」の最終ページには、目次のように各章題がまとめられた「contents」があります。章に数字を用いないこの作品にとって、見取り図ともなるものです。

現在流通している「*ab* さんご」は以下の 15 章。

Contents

受像者	最初の晩餐	満月たち	虹のゆくえ
しるべ	解釈	暗い買いもの	ねむらせうた
窓の木	予習	秋の靴	こま
	やわらかい檻	草ごろし	
	旅じたく		

しかし、1993 年に完成したもともとのバージョンは、4 部構成 40 章で構成されていました。

contents

I	II	III	IV
日だまり	最初の晩餐	全所有物目録	虹のゆくえ
しるべ	影の枝	満月たち	狩猟者の朝
文物	装置	暗い買いもの	ねむらせうた
暗算者	ゆうやけ	つるばら	ゆめがたみ
死者たち	予習	秋の靴	まくらの鳥
窓の木	遠いままだった声	えさ	ふきかえ
はごろも	よび名	後奏	風うら
結像	やわらかい檻	草ごろし	個体
ばね	みほん	ぶらんこ	おくの花づな
冊子の中	旅じたく	花ごよみ	こま

「*ab* さんご original」では、この 40 章すべてを読むことができます。

「*ab* さんご original」だけで読める！

時を経てふたつのバージョンが生まれた「*ab* さんご」。その内容の違いについて、黒田さんはこのように語っています。

> （「*ab* さんご」の）原型となった作品（「*ab* さんご original」）は、「親と子」のように中心素材が絞られていなくて、「記憶とは」「所有とは」といったことをめぐる章がいろいろ間に入って来る、たぶん読んだ印象がまるで違う作品になっています。
>
> 「「*ab* さんご」という時限爆弾」（「文學界」2013 年 3 月号）

「*ab* さんご」の 3 倍量のボリュームをもつ「*ab* さんご original」では、「親」と「子」と「家事がかり」の関係や過ごした歳月が、より詳しく、豊かに描かれています。たとえば「*ab* さんご original」だけで読めるのはこんなエピソード。

★「親」と「子」、それぞれが互いに向ける心情
★「親」の旧友や恋人、「子」の友人など新たな登場人物
★「小いえ」での生活を共にした動物たち
★「小いえ」を出た「子」の暮らしぶり

また、「*ab* さんご」と「*ab* さんご original」に共通して入っている章であっても、テキストの量が増えており、より作品世界が広がっています。

それがわかる章をさっそく読み比べてみましょう！

次のページから 9 ページまでは、
左ページ…「*ab*さんごoriginal」、
右ページ…「*ab*さんご」
の冒頭の章が掲載されています。

［ 日だまり ］

a というがっこうと *b* というがっこうのどちらにいくのかと，会うおとなたちのくちぐちにきいた百にちほどがあったが，きかれた小児はちょうどその町を離れていくところだったから，*a* にも *b* にもついにむえんだった．その，まよわれることのなかった道の枝を，半せいきしてゆめの中で示されなおした者は，見あげたことのなかったてんじょう，ふんだことのなかったゆか，出あわなかった小児たちのかおのないかおを見さだめようとして，すこしあせり，それからとてもくつろいだ．そこからぜんぶをやりなおせるとかんじることのこのうえない軽さのうちへ，どちらでもないべつの町の初等教育からたどりはじめた長い日月のはてにたゆたい目ざめた者に，みゃくらくもなくあふれよせる野生の小禽たちのよびかわしがある．

またある朝はみゃくらくもなく，前夜むかれた多肉果の紅いらせん状の皮が匂いさざめいたが，それはそのおだやかな目ざめへとまさぐりとどいた者が遠い日に住みあきらめた海辺の町の小いえの，淡い夕ばえのえんさきからの帰着だった．そこで片親とひとり子とが静かに並んでいた．いなくなるはずの者がいなくなって，親と子は当然もどるはずのじょうたいにもどり，さてそれぞれの机でそれぞれの読み書きをつづけるまえのつかのま，だまって充ちたりて夕ばえに染みいられていた．そういう二十ねん三十ねんがあってふしぎはなかったのだが，いなくなるはずの者がいなくなることのとうとうないまま，親は死に，子はさらにかなりの日月をへだててようやく，らせん状の紅い果皮が匂いさざめくおだやかな目ざめへとまさぐりとどくようになれた．ぎゃくにいえば，そうなれたからたちあらわれたゆめだ．

ひきかえせないといういみでなら，もっと早いいつのまくらにただよいからんでもおなじだったろうが，どんな変形をへてでも親と子ふたりでくらす可能性ののこっていたあいだはもちろん，それが

〈受像者〉

a というがっこうと *b* というがっこうのどちらにいくのかと，会うおとなたちのくちぐちにきいた百にちほどがあったが，きかれた小児はちょうどその町を離れていくところだったから，*a* にも *b* にもついにむえんだった．その，まよわれることのなかった道の枝を，半せいきしてゆめの中で示されなおした者は，見あげたことのなかったてんじょう，ふんだことのなかったゆか，出あわなかった小児たちのかおのないかおを見さだめようとして，すこしあせり，それからとてもくつろいだ．そこからぜんぶをやりなおせるとかんじることのこのうえない軽さのうちへ，どちらでもないべつの町の初等教育からたどりはじめた長い日月のはてにたゆたい目ざめた者に，みゃくらくもなくあふれよせる野生の小禽たちのよびかわしがある．

またある朝はみゃくらくもなく，前夜むかれた多肉果の紅いらせん状の皮が匂いさざめいたが，それはそのおだやかな目ざめへとまさぐりとどいた者が遠い日に住みあきらめた海辺の町の小いえの，淡い夕ばえのえんさきからの帰着だった．そこで片親とひとり子とが静かに並んでいた．いなくなるはずの者がいなくなって，親と子は当然もどるはずのじょうたいにもどり，さてそれぞれの机でそれぞれの読み書きをつづけるまえのつかのま，だまって充ちたりて夕ばえに染みいられていた．そういう二十ねん三十ねんがあってふしぎはなかったのだが，いなくなるはずの者がいなくなることのとうとうないまま，親は死に，子はさらにかなりの日月をへだててようやく，らせん状の紅い果皮が匂いさざめくおだやかな目ざめへとまさぐりとどくようになれた．ぎゃくにいえば，そうなれたからたちあらわれたゆめだ．

ひきかえせないといういみでなら，もっと早いいつのまくらにただよいからんでもおなじだったろうが，どんな変形をへてでも親と子ふたりでくらす可能性ののこっていたあいだはもちろん，それが

死によってかんぜんにうしなわれてもなお，帰着点がにがすぎればたちあらわれてはならないたぐいのゆめがあった．

ゆめの受像者の，三十八ねんもをへだてて死んだふたりの親たちのうち，さきに死んだほうの親のゆめも，ふたりともが死んでしばらくたつまではほとんどたちあらわれなかった．受像者が，あとから死んだほうの親とふたりだけというじょうきょうでつくられたじぶんに淫しきっていて，それいじょうさかのぼった未定などじぶんがじぶんでないからはかかわりもないとかんじていたからか，かかわりがないというよりはむしろ，親ふたりそろっていてのじぶん，きょうだいがあったりするじぶんなど敵でしかないとかんじていたからか．

親がふたりとも死んで，さらに年をへて，朝の帰着点がさざめきでかざられるようになった者が，ゆめの小べやの戸をあけると，さきに死んだほうの親がふとんに寝ていた．寝てはいたがいのちのあやういほど病んでいるというふうではなく，そうだったのか，あけさえすればずっとここにいたのだったかとなっとくした者は，じぶんの長いうかつなおもいこみをやすらかにあきれていた．またべつのゆめで，親ふたりと子とがつれだって歩いていた．歩いてはいたが，さきに死んだほうの親がすでに病んでいるともわかっていた．なおるともなおらないともきまっていないところまではひきかえしたということのようであり，それをゆめの受像者がじかにのぞんでいるというよりは，あとから死んだほうの親のためにひきかえしてやりたかったのにということのようでもあった．

あとのほうのゆめの前日，一まいのしゃしんが見られた．まんなかにねむりこむごく幼い猫の，左右の耳それぞれに鼻さきをよせるようにして，二ひきの成猫が巴がたに寝ている．片ほうが片ほうよりいくらか大きいのもちょうど家族の構図と見えるのだが，猫の家族なら通常一ぴきの成獣と複数の幼獣であろうから，そのまもられ

死によってかんぜんにうしなわれてもなお，帰着点がにがすぎればたちあらわれてはならないたぐいのゆめがあった．

ゆめの受像者の，三十八ねんもをへだてて死んだふたりの親たちのうち，さきに死んだほうの親のゆめも，ふたりともが死んでしばらくたつまではほとんどたちあらわれなかった．受像者が，あとから死んだほうの親とふたりだけというじょうきょうでつくられたじぶんに淫しきっていて，それいじょうさかのぼった未定などじぶんがじぶんでないからはかかわりもないとかんじていたからか，かかわりがないというよりはむしろ，親ふたりそろっていてのじぶん，きょうだいがあったりするじぶんなど敵でしかないとかんじていたからか．

親がふたりとも死んで，さらに年をへて，朝の帰着点がさざめきでかざられるようになった者が，ゆめの小べやの戸をあけると，さきに死んだほうの親がふとんに寝ていた．寝てはいたがいのちのあやういほど病んでいるというふうではなく，そうだったのか，あけさえすればずっとここにいたのだったかとなっとくした者は，じぶんの長いうかつなおもいこみをやすらかにあきれていた．またべつのゆめで，親ふたりと子とがつれだって歩いていた．歩いてはいたが，さきに死んだほうの親がすでに病んでいるともわかっていた．なおるともなおらないともきまっていないところまではひきかえしたということのようであり，それをゆめの受像者がじかにのぞんでいるというよりは，あとから死んだほうの親のためにひきかえしてやりたかったのにということのようでもあった．

てあたたかいむしんの至福にそそられるのが人の子にとってなつかしさに似ているとすれば，かなりいかがわしいおもいいれといわなければならない．しかし，見かけたときすぐにではなく，めずらしい三にんづれのゆめのあとでおもいだしてあらためて気づいたいかがわしさだったということは，そのしゃしんとゆめとを見た者が，いちどはすなおにまやかされたということだ．

両がわからの濃密なまなざしの日だまりは，じっさいにあったばあいにもなかったばあいにも，いまはないものとしてしかない．片ほうまたは両ほうが死ななくても，ことさらにひきはなされなくても，内から早晩こわれる．日だまりではねむりこんでいるしかなく，あとからくる者たちばかりかさきにいた者たちを視野にいれるだけでも，それどころか両がわを見くらべるだけでも，たちまちにかすれうすらぐ．

次のページからは、
「*ab*さんご」そして「original」が
もっと楽しく読める情報をお届けします！

「*ab* さんご」の楽しみ方

芥川賞を受賞し、たくさんの方に読んでいただいた「*ab* さんご」。独特の文体に苦戦した、という声も聞かれました。そこで、「*ab* さんご」、「*ab* さんご original」が読みやすく、ますます魅力的に感じられる、楽しみ方の「コツ」を一部ご紹介します！

①声に出して読む

ひらがなを多用し、一文が長い「*ab* さんご」の文体が読みにくく感じる方にオススメなのが、音読です。蓮實重彦さんは、新人賞の授賞式で最初の一ページを暗記して朗読を披露までしましたが「最初は呼吸を整えて黙読していましたが、声に出すと気持ちがいい、という快楽にすぐさま気づいちゃいました」と言っています。そして読めなければ声に出して読んでみることで、見えにくかったものがひたひたと見えてくるとも語っています。

②表現を推理する

「*ab* さんご」には、蚊帳を「へやの中のへやのようなやわらかい檻」と書き、傘を「天からふるものをしのぐどうぐ」と書くなど、何を指しているのか思い当たった瞬間、読みにくさが気持ちよさに変わる独特の表現が多く見られます。斎藤美奈子さんは「短く早く伝えることが望まれる風潮（…）に抗うように紡ぎ出されたまどろっこしい言葉の数々は「にほんご発見」と呼ぶにふさわしい」と評しました。

もちろん「*ab* さんご original」にもこのような表現がたくさん出てきます。**「年ごとにわりあてられている，古代中国の十二進法にゆらいするらしい動物たちの順列」、「水を張った花器の底に沈めおかれ，かたむけてさしこまれる長い枝のさきの大りんにも耐えるように，ことさら重いたちの金属のかたまりにされたその用具」**

さて、何のことでしょう？

③構成の特徴を知る

完成までに10年ちかい歳月を要した「*ab* さんご」。隅々まで行き届いたこだわりは、一章あたりの構成にも及びます。

黒田さんはインタビューの中でこのように語っています。

> 黒田　四十のパートで二百八十枚。ひとつ七枚くらいですね。そのまとまりにしたのは、ひじょうに意識的にやったつもりです。
> ── そうして、その七枚ずつのパートが、さらにそれぞれふたつのブロックでできていますね。
> 黒田　ぴったり半分じゃなくて、前半がわりに重くて、後半に短いのがつけくわわる、不均衡なかたちが多いんですけれど。

この言葉から、作品が緊密な対称性をもった構造体として書かれていることが伝わってきます。さらに次のようにも語っています。

> 黒田　「文學界」の対談でお話をさせていただいたとき、新人賞の選者でいらした蓮實重彦さんもそこにこだわられて、「十五のうちの十はふたつに割れていますよね」とおっしゃっていました。こまかく数えてくださったことにびっくりしちゃったけれど（笑）、もとはぜんぶがそういうかたちだったんです。
> ── そこにはどんな意図があったんですか？
> 黒田　「*ab* さんご」を、流れてゆく叙述ではなくて、ひとつずつ独立したものをあわせる形式にしたかったんです。七枚なら七枚がひとつの固まりにつながってしまうのではなく、切れたふたつの取りあわせのおもしろさも出してみたかった。さらにそれが四十取りあわせられる、というかたちですね。
> 「「*ab* さんご」の季節」（「早稲田文学⑥」）

黒田さんのいう「切れたふたつの取りあわせのおもしろさ」を、「*ab* さんご original」で味わってみてください！

次のページから15ページには、
「*ab*さんごoriginal」だけで読める章
［文物］が掲載されています。

［ 文物 ］

ひきだしにはさまざまの物がひそんでいた．たくさんの荷を祝われてきて千にちで寝ついてしまった者は，ほとんどよごしもへらしもしなかった物たちをありちらして死に，のこった家人のまぎれていく日常のあちこちに物としてひそみつづけることになった．死者の子にしてみれば，気がついたとき片親は物だった．色のさめているでもない，いないでもない，ふさつきの組みひもとか，きつい匂いのおりをからびつかせた切り子の香水吹きとか，なんの理由でか止め具からはずされて裸の，うす青いかざりだまとかだった．あちこちから見つかる，色や匂いや手ざわりのかけらだった．

見いだされるまでもなく日用に供されていた物たちはべつとしても，かたみとして贈りものとしてよそへ出ていった物たちはべつとしても，なおおびただしいかけらのすべては，見さだめおえたとはけしておもわれないので，こうして家うちの持病のように，住む者のけだるさだった．見さだめないままに手ばなしていくというかかわりかたのほかのかかわりかたがあるかないかも見さだめないままの生の原古は，だからなおどちらであろうとおちつかなくて，しばらくのぞかない戸棚のおくや手箱のすみへの気がかり，用途のわからなかった切れはしのおぼろなたたずまいへのこだわりにそそりたてられる，にわぜきしょうの雨夜や，朝から日のただれた葛の葉びよりをうちかえした．

死病と早逝が捨棄を忌みごとにしたため，死者の持ちものがかたづけられなかっただけでなく，家ぜんたいのかたづけられる機能ものちのちまでいすくんだ．家屋そのものは死者があって五百にちほどで住みうつられたのだが，五百にちはまだいちいちの取捨を問うのがはばかられる日かずとかんじられて使用人たちはひたすらひしひしとつめ，そうなればもうなにがどこにあるのか，つめた者たちにもよくはわからないことになった．家屋がずっとおなじなら死者

がどこにどうしまっていたかがもっとこだわられたかもしれないから，物によっては転地さきの別荘との往復をくわえて三どもの移動をへたことはまだしもの病みの軽さになったようでもあるが，実用の出し入れをかんがえにいれないひしめかせかたでひしめかせたことで，いっそうもつれを濃くしたようでもあった．

はじめの家では，使用人たちのはたらく階と，二万さつほどの書物とともにこもっている者専用の階と，その配偶である早逝者とその子とが寝起きしていた階とは，三そうふきぬけの階段のおどりばごとに，おなじかたちの壁あかりとおなじかたちの花いれとがとりつけられてはいても，べつの階はべつの域，生の原古にある者がつねには顧慮しなくていい異界だった．はこびあげられてははこびおろされていく皿や鉢，温いわんや甘いつぼ，また出入りぐちにそろえられる履きものなどじかにかかわる物も，要ればおのずとあてがわれるうちはおもいまつわられない．

しかし，目のまえにない物にもおもいまつわる年齢にようやくさしかかっていた者が住みうつったつぎの家は，はじめの家の一そうよりももっとせまかった．このことは軽さよりも重さとなり，簡素よりも煩雑となった．はるかに小さな入れものに持ちうつすについて捨棄が封じられていれば，物たちはただしゃにむにつめこまれるほかなかったうえ，異界とは見なしえない手ぢかなあたりににわかにこごってしまったからだ．

幼弱がむしろまもりとなったようで，持ちあげられないじっさいの重さや，踏み台に乗ってもおよばないじっさいの高さは，物たちがいちどきに押しよせるのをふせいだ．それにしても，たとえばさいわい大半が背もんじさえ読めない異国語であるためのっけから逐っておけた二万さつにしても，急ごしらえの書庫をあふれた書架が，使い手の小べやの四囲はもちろん，ろうかにも出入りぐちにも食べるへや寝るへやにもおかれて小いえぜんたいを暗ませているとあっては，それからまた，さりげないひきだしのひとつからたちま

ち百体もわきだす小にんぎょうの蒐集を見知っているからは，見つくさないどんなすきまも，おびえに似たなやましいわだかまりでないわけはなかった．

日の下に，小児どうし名をたずねあう花も貝がらもあって，新しい風と新しい条理のひかる外界の事物の多量を見ないほど閉じていたのではなく，それでいてなお家うちにかかえる文物のほうがさらに多量だとかんじていた者は，死者のをゆずりうけた文机や鏡台のひきだしからはじめて，やがてだましだましやっと動かせる物をいくつもどけたおくの大つづらの底までをつぶさに見しらべていった．それらをありちらして死んだ当の持ちぬしよりも，荷づくりをした者たちよりも，むろんのこと生きているほうの片親よりもくわしく見しらべ，それにもかかわらずつのる見さだめきれなさの歌を聴いた．

どのひきだしをあけると，どんな匂いがするか，ひきあけたすぐ手まえにはどんなけはいの布とか紙とか木とかがだまってひかえているか，よく知っているふしまわしのように，一ど目よりも二ど目，五ど目よりも十ど目に哀切なときめきがあり，ときめきはつもりかさなり，らちもなかった．あけるとき，しめるとき，手をはなすとみれんげにゆれきざむ，ひきだしのひき手の打音のおくにさぐり聴く，ぜったいの気のすまなさの歌だった．

荷づくりをした者の最後のひとりで，そののちも四ねん，早逝者の子のせわをしてきた使用人が去った春，捨てることから捨てられた家のけだるさはあらためて十さい児ひとりにせおいなおされた．すべてが，じぶんが見さだめないかぎり見さだめられないものとして沈みなおしたとかんじられたので，いっそうしげしげとひきだしは淫しかさねられた．そとからやってくる物がきわめてとぼしい戦時の予後，実用にかあそびにかくふうできそうな品をさがすのはせつじつな欲望でもある．

つづらやひきだしには，死者のものだけではなく，小児じしんのすんぽうがもっと小さかったころの衣料や手まわり品も混在していて，それら大きくなったら使えそうなぜいたく品，かつて小さかったとき使ったぜいたく品を手にとることじたい，未来とのあそび，過去とのあそびであり，好奇と懐旧との同質は，ひきだしに淫する者の自明の輪唱曲だった．

［特製本］

黒田夏子
「*ab* さんご original」

愛蔵版美麗金箔押
四六変型並製
148 頁

特製本「*ab*さんご original」は、こちらでのみお求めいただけます。

早稲田文学⑥特装版
［1000部限定］

A5判 548頁＋四六変形判 148頁
定価：2400円（税込）
ISBN：978-4-948717-08-4 C0095　¥2286E

全国書店、ネット書店、早稲田文学サイトで好評発売中！

発行・発売：早稲田文学会
tel/fax：03-3200-7960
東京都新宿区西早稲田 1-6-1 早稲田大学 9 号館地下 1 F
mail：wbinfo@bungaku.net
URL：http://www.bungaku.net/wasebun/